

腔温計測の価値

(第1報)

金沢大学医学部産科婦人科学教室(主任 笠森教授)

教授 笠 森 周 護

助手 田 中 輝 彰

副手 菅 田 秀 俊

(昭和32年9月5日受付)

The Temperature in Vaginae of Normal and Morbid Women

SHUGO KASAMORI

TERUAKI TANAKA

HIDETOSHI SUGATA

Department of Obstetrics and Gynecology, School of Medicine

Kanazawa University

(Director : Prof. Dr. Shugo Kasamori)

(昭和23年4月, 日本婦人科学会総会発表)

ABSTRACT

The temperature in vaginae of normal and morbid women were measured, and significances of this measurement are as follows:-

(1) The average temperature in vagina was 37.5 degree C, approximately one degree higher than the axilla temperature.

(2) The temperature curve exhibits a characteristic course during the ovarian cycle, with a slight fall in the interval phase.

(3) In patients with hypoplastic uteri, the temperature was slightly lower than the normal women.

(4) The rise of the temperature is exhibited by injections of sexual hormones and irradiations of radiotherapy, and in the other hand, the fall is owing to the X-ray irradiation on cancers or/and myomas of uteri.

I. 緒 論

体温調節の中樞は糸状体又は視丘下部の灰白隆起の附近に在りと説かれ、主として自律神経を通じて熱発生調節を行ふものとなされている。Bneke は月経に基く植物神経系の失調を説き、Stolper の説では、卵胞は迷走神経を緊張させ、黄体は交感神経を刺激し、ために月経前期には交感神経緊張症に傾き、月経後期～間歇期には迷走神経緊張症に陥り易いと説いている。Somogyi は、月経前期の体温上昇を交感神経

緊張者に認め、迷走神経緊張者にはこれを見ることが稀であるとなした。斯くの如く、体温調節中樞は内分泌臓器並びに植物神経に密接な関係を有するから、成熟婦人体温の周期的動揺も亦自から明らかである。更に植物神経と性器並びにその血管との密接な機能的関係を考慮すれば、腔温も亦内分泌臓器並びに植物神経系に支配されることが推定される。余等は腔温を臨牀的に観察し、これと同時に腋窩体温を測定し、両者を

比較した結果をここに報告せんと欲するものである。

II. 実験方法

第1節 実験材料

昭和22年2月1日以降約半年間における吾が教室外来及び入院患者について観察した。

(1) 成熟婦人であつて、子宮後転症を有するのみでその他の疾患を有することなく、療法として子宮円靱帯皮下短縮術を施行し、その後順調に10日を経過した者を正常成熟婦人として観察した。

(2) 子宮發育不全症例としては、雙合診並びに消息子検診に基いて、子宮は前傾前屈し、子宮体の發育は不良で、子宮腔縦径は7cm以下を算し、付属器の正常なる者を選出した。

(3) 妊婦例としては、妊娠3, 5, 8, 10カ月で、何らの病的症状を示さない正常経過にある者について観察した。

(4) 発熱例としては、気管支炎が発熱の原因と思

われる者を選んだ。

(5) 月経周期と腔温との関係を見るために、月経が29~30日型で整調に反復し、性器疾患就中炎症性疾患を欠く婦人を選定調査した。

第2節 腔温測定方法

検温器としては5分間体温計で、腋窩検温用と腔検温用との相互間に感度の相違なきものを選出して使用した。検温は午前10~12時の間に、室温10~25°Cのもとに次記の如く行つた。即ち仰臥位において、腔鏡を以て後腔穹窿を露わし、この部を清拭せずそのまま此所へ検温器を挿入し、器の位置移動を避けながら鏡を抜去し、両側大腿部を密接させて5分間検温した。同時に左右腋窩へ検温器を挿入して5分間検温し、その平均値を求めて腋窩温とした。

III. 実験成績

第1節 正常成熟婦人の腔温

23~38歳の正常成熟婦人6例について、腋窩温と腔温とを測定した成績は、第1表の示す如くである。即ち午前8時、正午、午後4時及び8時の4回に計測し、毎回計測値の平均値として、腋窩温は36.4~36.5-36.5-36.5°C、腔温は37.3~37.4-37.5-37.5°C、その差は0.9-0.9-1.0-1.0°Cを算したが、

第1表 正常成熟婦人腋窩温、腔温並びに温差平均値(C°)

	午前8時	正午	午後4時	午後8時
腋窩温	36.4	36.5	36.5	36.5
腔温	37.3	37.4	37.5	37.5
温差	0.9	0.9	1.0	1.0

〔註〕 実験例数…6. 年齢…23~31歳
連続3回検温平均値を以て正值とした。

第2節 子宮發育不全症における腔温

年齢21~32歳の子宮發育不全婦人20例につき、腋窩温と腔温とを測定し、第2表の成績を得た。即ち、腋窩温平均値36.4°C(36.7~36.1°C)、腔温平均値37.2°C(36.8~37.6°C)、両温差0.8°C(0.6~1.1°C)を示した。

第2表 各種臨床所見における腋窩、室温並びに温差平均値(C°)(午前10時~正午測定)

臨床所見	年齢	例数	腋窩温	腔温	温差	
子宮發育不全	20~32	20	36.4	37.2	0.8	
妊娠3カ月	20~37	20	36.6	37.7	1.1	
妊娠5カ月	20~36	20	36.5	37.6	1.1	
妊娠8カ月	25~35	20	36.5	37.5	1.0	
妊娠10カ月	22~36	20	36.5	37.6	1.1	
発熱時	21~53	20	37.93	38.51	0.58	
月経周期	後期 間期 前期	24~39	10	36.3	37.4	1.1
				36.2	37.1	0.9
				36.5	37.5	1.0

第3節 妊婦の腔温

妊娠第3, 5, 8, 10カ月における妊婦腔温、腋窩温及び両温差の平均値は第3表(A)(B)(C)(D)の示す如くである。即ち(1)妊娠第3月(21~38歳): 腔温平均値37.7°C(37.0~38.0°C)、腋窩温平均値36.6°C(35.9~37.1°C)、両温差平均値1.1°C(0.8~1.5°C)。(2)妊娠第5月(21~36歳): 腔温平均値37.6°C(37.2~38°C)、腋窩温平均値36.5°C(36.1~37.1°C)、両温差平均値1.1°C(0.8~1.4°C)。

(3) 妊娠第8月(25~35歳): 腔温平均値 37.5°C (37.0~38°C), 腋窩温平均値 36.5°C (36.1~37°C), 両温差平均値 1.0°C (0.6~1.3°C). (4) 妊娠第10月(22~36歳): 腔温平均値 37.6°C (36.8~37.9°C), 腋窩温平均値 36.5°C (35.8~37°C), 両温差平均値 1.1°C (0.5~1.4°C) を示した.

第4節 発熱時の腔温

発熱の原因が急性気管支炎に在る例について, 腋窩温並びに腔温を測定した結果は, 第4表に示す如くである. 即ち, 腔温平均値 38.5°C (37.8~39.6°C), 腋窩温平均値 37.9°C (37.2~39°C), 両温差平均値 0.58°C (0.2~1.0°C) を算した.

第5節 性周期に関する腔温の変化

同一婦人における月経周期各期における腔温, 腋窩

温及び両温差は第5表に示す如くである. 表中の月経後期とは月経終了日を第1日と起算して第7日迄, 月経間期とは同様計算法によつて月経終了第11日より第17日迄の7日間, 月経前期とは予定月経前1週間を意味するものである. 表示の如く(1) 月経後期(24~39歳): 腔温平均値 37.4°C (37~37.8°C), 腋窩温平均値 36.3°C (36.1~36.6°C), 両温差平均値 1.1°C (0.9~1.6°C). (2) 月経間期: 腔温平均値 37.1°C (36.9~37.4°C), 腋窩温平均値 36.2°C (35.9~36.4°C), 両温差平均値 0.9°C (0.7~1.2°C). (3) 月経前期: 腔温平均値 37.5°C (37.2~37.8°C), 腋窩温平均値 36.5°C (36.1~36.8°C), 両温差平均値 1.0°C (0.8~1.4°C) を示した.

IV. 総括並に考案

以上の実験成績を総括して, その意義を考察すると, I. 正常成熟婦人においては, 腋窩温平均値には時間的動揺少なく概ね 36.4°C 内外を示している. 腔温は腋窩温に比し平均 0.9~1.0°C 高く, 午後において特に上昇し, 午後8時には平均 37.5°C を示し, 計測時間の範囲においての最高温となる. だから若し正常婦人腔温が主として卵巢機能によつて支配されるものであるならば, 卵巢内分泌機能は午後殊に夜間において亢進するものと推定される. II. 子宮發育不全婦人の腔温平均値は 37.2°C (36.8~37.6°C), 腋窩温との平均差は 0.8°C (0.6~1.1°C) を算した. これを正常成熟婦人例と比較すると, 午前中の腔温平均値において 0.2°C 低く, 腋窩温との差も亦正常例と比較して平均 0.1°C 低い. これ恐らくは卵巢機能の低下に基づくものと思考される. III. 妊婦の腔温は, (1) 妊娠第3月平均値 37.7°C (37~38°C), 腋窩温との平均差 1.1°C (0.8~1.5°C). (2) 妊娠第5月平均値 37.6°C (37.3~38°C), 腋窩温との平均差 1.1°C (0.8~1.4°C). (3) 妊娠第8月平均値 37.5°C (37~38°C), 腋

窩温との平均差 1.0°C (0.6~1.3°C). (4) 妊娠第10月平均値 37.6°C (36.8~37.9°C), 腋窩温との平均差 1.1°C (0.5~1.4°C) を算した. これを正常婦人の腔温と比較すると, (a) 妊娠第3月平均値において 0.3°C, (b) 妊娠第5, 8, 10月平均値において夫々 0.2~0.1~0.2°C 高い. だが妊娠第3, 5, 8, 10月における腔温の平均値は 37.5~37.7°C の範囲に止り, 各月における腔温は互に著差を示さない. IV. 発熱時の腔温は腋窩温と共に上昇するが, 必ずしも正比を保つことはない. 而して両温差平均値は 0.58°C (0.2~1.0°C) であつて, これを正常婦人例に比較すると, 温差は甚だしく低下している. 即ち発熱に際しては腔温の上昇度は腋窩温のそれよりも軽度であることが知られる. V. 月経周期と腔温との関係を見るに, 月経前期平均値 (37.5°C) は最高で, 後期 (37.4°C) これに次ぎ, 間期 (37.1°C) が最低であり, 腋窩体温も亦同様の順序に変化する. 而して斯くの如き体温の変化は卵巢内分泌並びに植物神経作用に基づくものと思考される.

V. 結

- (1) 正常成熟婦人においては, 腔温は腋窩温に比し平均 0.9~1.0°C 高く, 午後において特に上昇する.
- (2) 子宮發育不全婦人の腔温平均値は 37.2°C であつて, 正常婦人の腔温平均値よりも 0.2°C 低い.
- (3) 妊娠によつて腔温は上昇し, 正常婦人に比し平

論

均 0.2°C 高くなる. 然るに妊娠第3, 5, 8, 10月における腔温の平均値は 37.5~37.7°C の範囲に止り, 相互間に著差を示さない.

- (4) 発熱時の腔温は腋窩温と共に上昇するが, 腔温は腋窩温ほどには上昇しない. 即ち両温平均差は 0.5

8°Cである。

(5) 月経周期と腔温との関係を見るに、月経前期平均値 (37.5°C) は最高で、後期 (37.4°C) これに次

ぎ、間期 (37.1°C) が最低である。

(6) 以上の各事項に基き、腔温の変化は卵巣内分泌を重要な一因とすることが識られる。

(第2報) 性「ホルモン」療法並びに超短波療法による腔温の変化

余等は第1報において、腔温と卵巣機能との密接な関係を報告したが、更に婦人科的性「ホルモン」療法

及び超短波療法によつて、腔温が如何に変化するかを究明し、茲にその成績を報告するものである。

I. 実験方法

第1節 実験材料

(A) 昭和22年2月1日以降約半年間に、吾教室へ入院又は通院して治療を受けた患者の中で、(イ) 性「ホルモン」療法と腔温との関係を検するためには、月経不順の訴ある者を選び、「ロ」 「ラヂオテルミー」療法の腔温に及ぼす作用を検するためには、慢性付属器炎を有する者を選んだ。

(B) 使用した発情物質並びに性「ホルモン」剤は Stilben 誘導体である「オイベンチン」(武田) 並びに Testosteron-A である「アモリジン」(武田) であつて、子宮内膜搔爬術施行後第1日から、又は月経終了後第1日から、「オイベスチン」1日 1cc (10000 I. U)

宛7日間皮下に連日注射の後、7日間注射を中止し、再び7日間「アモリジン」1日 0.5cc (150r=37.5 I. C. U) 宛皮下に注射した後に、7~10日間注射を中止し、上記様式における注射を反復した。

(C) 使用した「ラヂオテルミー」の装置は「ライフ」超短波 38R 型であつて、一次電圧 100V、50~60S、一次電流 3.5~9A、波長 6m とし、導子 12×10cm²、治療時間10分とし、腔~腋窩温の計測は10分間通電の前後にこれを行つた。

第2節 腔温測定方法

第1報に報告した方法と全く同一である。

II. 実験成績

第1節 性「ホルモン」療法と腔温

月経不順の訴ある患者について、「ホルモン」療法を行い、その腔温を測定した結果は第1表に示す如くである。

(1) 「オ」と腋窩温との関係： 注射前平均値 36.4°C (36.2~36.8°C)、7日間連日注射後 36.5°C (36.2~36.8°C)、その差 0.1°C。

(2) 「オ」と腔温との関係： 注射前平均値 37.3°C (36.9~37.6°C)、7日間連日注射後 37.5°C (37.1~37.9°C)、その差 0.2°C。

(3) 「ア」と腋窩温との関係： 注射前平均値 36.3°C (36.1~36.5°C)、7日間連日注射後 36.5°C (36.2~36.9°C)、その差 0.2°C。

(4) 「ア」と腔温との関係： 注射前平均値 37.1°C (37.0~37.8°C)、7日間連日注射後 37.5°C (37.2~38.1°C)、その差 0.4°C であつた。

(5) 15例の実験例中「オイベスチン・アモリジン」

療法終了後の腔温が、療法開始前に比べて、上昇12例、不変1例、低下2例を算した。上昇度の最高 0.9°C、12例の下降度は 0.1~0.9°C で平均 0.35°C である。

第2節 「ラヂオテルミー」療法と腔温

20例について、治療開始前及び10分間通電治療直後に腋窩温並びに腔温を測定した結果は、第2表に示す如くである。

(1) 治療前の腋窩温平均値 36.4°C (35.5~36.8°C)、治療後 36.48°C (35.7~36.8°C)、治療後の上昇度 0.08°C。

(2) 治療前の腔温平均値 37.4°C (37.1~37.9°C)、治療後 37.55°C (37.1~38.1°C)、治療後の上昇度 0.15°C。即ち治療によつて腔温の上昇したもの10例、不変10例、上昇度は 0.1~0.3°C。治療によつて腔温の上昇したもの15例、不変5例、上昇度は 0.1~0.4°C を算した。

第1表 性「ホルモン」療法と腔温 (C°)
自午前10時 至正午間測定) 一下降

実験例	年 齢	「オイバステン」注射						「アモリジン」注射						「ホ」療法における腔温差	正常月経有無
		腋 窩 温			腔 温			腋 窩 温			腔 温				
		注射前	注射後	温 差	注射前	注射後	温 差	注射前	注射後	温 差	注射前	注射後	温 差		
1	22	36.3	36.4	0.1	37.1	37.4	0.3	36.3	36.3	0	37.2	37.3	0.1	0.2	—
2	33	36.5	36.4	-0.1	37.3	37.6	0.3	36.4	36.6	0.2	37.0	37.6	0.6	0.3	—
3	21	36.6	36.7	0.1	37.2	37.5	0.3	36.5	36.4	-0.1	37.2	37.5	0.3	0.3	+
4	29	36.4	36.5	0.1	37.3	37.4	0.1	36.2	36.7	0.5	37.0	37.7	0.7	0.4	+
5	24	36.7	26.5	-0.2	37.3	37.3	0	36.5	36.6	0.1	37.2	37.4	0.2	0.1	+
6	26	36.1	36.4	0.3	36.9	37.4	0.5	36.1	36.6	0.5	37.0	37.8	0.8	0.9	+
7	26	36.6	36.5	-0.1	37.5	37.6	0.1	36.3	36.3	0	37.3	37.4	0.1	-0.1	—
8	24	36.8	36.7	-0.1	37.6	37.8	0.2	36.4	36.7	0.3	37.4	37.9	0.5	0.3	—
9	30	36.7	36.8	0.1	37.6	37.9	0.3	36.5	36.9	0.4	37.8	38.1	0.3	0.5	—
10	26	36.4	36.2	-0.2	37.0	37.1	0.1	36.5	36.5	0	37.1	37.5	0.4	0.5	+
11	26	36.2	36.4	0.2	37.3	37.6	0.3	36.1	36.5	0.4	37.2	37.6	0.4	0.3	—
12	23	36.4	36.4	0	37.4	37.6	0.2	36.2	36.5	0.3	37.1	37.4	0.3	0	—
13	25	36.6	36.5	-0.1	37.3	37.3	0	36.2	36.3	0.1	37.1	37.2	0.1	-0.1	—
14	27	36.4	36.5	0.1	37.3	37.6	0.3	36.3	36.7	0.4	37.0	37.7	0.7	0.4	—
15	24	36.5	36.6	0.1	37.2	37.4	0.2	36.1	36.2	0.1	37.2	37.3	0.1	0.1	—
平均	25.7	36.48	36.50	0.02	37.35	37.50	0.15	36.30	36.52	0.22	37.19	37.56	0.37		

第2表 「ラヂオテルミー」療法と腔温 (C°)
(自午前10時 至正午間測定)

実験例	年 齢	腋 窩 温			腔 温		
		治療前	治療後	温 差	治療前	治療後	温 差
1	39	36.5	36.6	0.1	37.5	37.7	0.2
2	30	35.5	35.7	0.2	37.2	37.3	0.1
3	39	36.4	36.4	0	37.3	37.3	0
4	25	36.6	36.7	0.1	37.9	38.1	0.2
5	28	36.4	36.4	0	37.5	37.6	0.1
6	26	36.5	36.5	0	37.4	37.7	0.3
7	25	36.8	36.8	0	37.8	37.8	0
8	33	36.2	36.3	0.1	37.3	37.4	0.1
9	21	36.3	36.6	0.3	37.3	37.5	0.2
10	24	36.7	36.7	0	37.5	37.5	0
11	25	36.4	36.5	0.1	37.3	37.5	0.2
12	26	36.0	36.2	0.2	37.4	37.8	0.4
13	32	36.3	36.3	0	37.5	37.6	0.1
14	32	36.2	36.3	0.1	37.1	37.2	0.1
15	30	36.5	36.5	0	37.3	37.3	0
16	28	36.8	36.8	0	37.7	37.9	0.2
17	34	36.4	36.5	0.1	37.6	37.7	0.1
18	29	36.7	36.7	0	37.6	37.8	0.2
19	33	36.1	36.3	0.2	37.2	37.5	0.3
20	21	36.3	36.3	0	37.1	37.1	0
平均	29	36.4	36.48	0.08	37.4	37.55	0.15

Ⅲ. 総括並びに考案

以上の実験成績を総括すると、(A) 性「ホルモン」療法では (1) 「オイベスチン・アモリジン」注射一巡治療による腔温の上昇率80%, 上昇度 $0.1\sim 0.9^{\circ}\text{C}$, 平均 0.35°C . (2) 「オイベスチン」注射療法によつて、腔温は平均 0.15°C 上昇した. (3) 「アモリジン」注射療法によつて、腔温は平均 0.37°C 上昇した. (4) 「オイベスチン・アモリジン」注射療法によつて腔温が上昇した例では、従来不順であつた月経の持続

期間及び月経血量が正常化したもの4例、腔温が上昇しなかつた例では1例も正常月経が認められなかつた. (B) 「ラヂオテルミー」療法例では、(1) 腋窩温の上昇50%, 不変50%, 上昇度平均値 0.15°C ($0.1\sim 0.3^{\circ}\text{C}$), (2) 腔温上昇例75%, 不変25%, その上昇度平均値 0.18°C ($0.1\sim 0.4^{\circ}\text{C}$). (3) 本療法に際しては、自覚的温熱感と他覚的皮膚温度上昇とが認められるが、腔温の上昇は軽微である.

Ⅳ. 結

性「ホルモン」療法、「ラヂオテルミー」療法が腔温並びに腋窩温に及ぼす影響を観測して次の結論に達した.

I. 性「ホルモン」療法では、(1) 「オイベスチン・アモリジン」注射一巡治療による腔温上昇率80%, 上昇度平均 0.35°C である. (2) 「オイベスチン」注

論

射療法によつて、腔温は平均 0.15°C 上昇し、「アモリジン」注射療法によつて腔温は平均 0.37°C 上昇した.

II. 「ラヂオテルミー」療法では、(1) 腋窩温の上昇50%, 上昇度平均 0.15°C . (2) 腔温の上昇75%, 上昇度平均 0.18°C で、腔温の上昇は軽微である.

第3報 「レ」線深部治療による腔温の変化

余等は先に腔温が卵巣機能に密接な関係を有することを報告したが、「レ」線深部治療により卵巣能が消

失した場合の腔温について攻究を進め、茲にその成績を報告する.

I. 実験方法

第1節 実験材料

昭和22年2月1日以降約半年間に吾教室に入院治療を受けた子宮腔部癌患者並びに子宮筋腫患者の一部について実験した.

(1) 照射条件

二次電圧 180KV , 二次電流 3mA , 濾過板 $0.7\text{mm Cu}\times 1.0\text{mmAl}$, 照射野 $6\sim 10\text{cm}^2$, 照射門数 $12\sim 10$, 皮膚焦点間距離 25cm , 一野照射量 $550\sim 600\text{r}$ (島津標準量測定器 No. 508)

(2) 照射術式

吾教室における深部療法は小照射野集中照射法であつて、1日1野、 $10\sim 12$ 野照射を行つている. この際吾教室考案に成る「レ」線照射方向距離測定器を使用して、「レ」線束を確実に腫瘍中心へ集中せしめる様式が使用されている. 照射前に直腸、膀胱を空虚にし、子宮腔部癌に対しては、深部量増加を目的とする特種の操作が加えられている.

第2節 腔温測定方法

第1報報告と同一である.

II. 実験成績

第1節 子宮腔部癌深部照射例

子宮腔部癌患者15例を選び、その深部治療一巡終了前後の腋窩温、腔温を測定した結果は第1表に示す如

くである.

1. 腋窩温の変化: 照射開始前腋窩温平均値 36.3°C ($35.9\sim 36.9^{\circ}\text{C}$), 照射一巡終了後平均値 36.3°C

(36.0~36.7°C).

8~37.7°C), 照射一巡終了後平均値 37.1°C (36.6~

II. 腔温の変化 : 照射開始前平均値 37.4°C (36.

37.5°C).

第1表 「レ」線深部治療による腔温の変化

(A) 子宮腔部癌照射例

(自午前10時 至正午間測定) +上昇 一下降

実験例	年齢	腋窩温			腔温		
		照射前	照射後	温差	照射前	照射後	温差
1	46	36.7	36.6	-0.1	37.7	37.3	-0.4
2	38	36.3	36.2	-0.1	37.6	37.1	-0.5
3	51	36.1	36.3	+0.2	37.5	37.4	-0.1
4	48	36.2	36.5	+0.3	37.4	37.5	+0.1
5	53	36.5	36.3	-0.1	37.7	37.2	-0.5
5	57	36.9	36.4	-0.5	37.5	37.0	-0.5
7	45	36.2	36.2	0	37.1	36.9	-0.2
8	46	36.1	36.0	-0.1	37.3	37.2	-0.1
9	42	36.0	36.2	+0.2	37.1	37.1	0
10	44	36.7	36.5	-0.2	37.6	37.0	-0.6
11	46	36.5	36.1	-0.4	37.5	37.3	-0.2
12	50	35.9	36.0	+0.1	36.8	36.6	-0.2
13	52	36.0	36.3	+0.3	37.3	37.3	0
14	39	36.8	36.5	-0.3	37.7	37.2	-0.5
15	40	36.2	36.7	+0.5	37.4	37.1	-0.3
平均	43	36.3	36.3	0	37.4	37.1	-0.3

第2節 子宮筋腫深部照射例

1~36.6°C).

子宮筋腫深部照射例における深部治療施行前後の腋窩温並びに腔温の変化は第2表の如くである。

I. 腋窩温の変化 : 照射開始前平均値 36.5°C (36.2~36.7°C), 照射一巡終了後平均値 36.3°C (36.

II. 腔温の変化 : 照射開始前平均値 37.2°C (37.6~378.°C), 照射一巡終了後平均値 37.2°C (37.0~37.5°C).

第2表 「レ」線深部治療による腔温の変化 (C°)

(B) 子宮筋腫照射例

(自午前10時 至正午間測定) +上昇 一下降

実験例	年齢	腋窩温			腔温		
		照射前	照射後	温差	照射前	照射後	温差
1	57	36.5	36.6	+0.1	37.8	37.1	-0.7
2	46	36.7	36.2	-0.5	37.8	37.2	-0.6
3	44	36.2	36.3	+0.1	37.6	37.1	-0.5
4	42	36.4	36.5	+0.1	37.7	37.0	-0.7
5	41	36.5	36.1	-0.4	37.6	37.5	-0.1
平均	46	36.5	36.3	-0.2	37.7	37.2	-0.5

Ⅲ. 総括並びに考案

子宮腔部癌患者 15 例，子宮筋腫患者 5 例につき，「レ」線深部治療前後の腔温並びに腋窩温を測定した結果を総括すると，

I. 子宮腔部癌深部照射例では，(1) 腋窩温は照射によつて変化を示さない。(2) 腔温は照射後に 0.3°C の低下を示した。

II. 子宮筋腫深部照射例は，(1) 腋窩温は照射後

に 0.2°C の低下を示した。(2) 腔温は照射後に 0.5°C の低下を示した。これを要するに「レ」線深部照射によつて，腋窩温は不変又は極めて僅かに低下するに反し，腔温の低下は $0.3\sim 0.5^{\circ}\text{C}$ に達する。これ「レ」線による卵巢機能の荒廃に基くものと思考せられる。

Ⅳ. 結

子宮腔部癌患者並びに子宮筋腫患者につき，「レ」線深部治療前後の腋窩温並びに腔温を測定し次の結論に達した。

(1) 「レ」線深部照射によつて，腋窩温は不変又は極めて僅かに低下するに反し，腔温の低下は $0.3\sim 0.$

論

5°C に達する。

(2) これは主として「レ」線による卵巢機能の消失に基くものと考えられ，腔温は卵巢機能と密接な関係を有することが認められる。